

国内研修報告書

2016年8月25日から約1週間、島根県の隠岐諸島にお邪魔した。去年もお世話になり今年で二回目の訪問になる。去年の国内研修でこの島の魅力に取りつかれ、再びこの島に訪れたいと思ったからである。キンニャモニャ祭りや島の壮大な自然、島の人々の温かさに触れながら充実した日々を過ごさせて頂いた。他にも島の中学校での中学生との交流や西ノ島町役場の方々へのインタビュー、牧畜見学など現地だからこそ出来る体験や聞けるお話しなどが数多くあった。現地での貴重な体験やお話しは、島の人々の協力があってこそのものであり感謝するばかりである。

二日目にお邪魔した西ノ島中学校では、島の中学生との交流授業を通じて将来像を描き、その実現のためにどうがんばっていくかなどを考えるサポートをした。大学生が話を引っ張っていき、最終的な結論まで持って行ってほしいと教員から言われていたため、自然な話の流れで意図した結論までもっていくことに難しさを感じた。交流授業のまえに担当教員と今回の授業の“ねらい”などといった意図の説明がなされ、大学生として明確な立場を理解したうえで授業へ望むこととなった。始まる直前まで、意図しているねらい通りに進められるかなど不安に感じていたが、グループになった二人の中学生は、積極的に交流を図ろうとしてくれる子たちでかなりスムーズに進めることが出来た。中学生たちとの交流授業を通して最も印象に残っているのは、どの中学生も“島”という環境になんらかの考えを持っているということである。ある生徒は自分の将来の夢と島を結びつけて、島にとって何らかの役に立ちたいと考えており、自分が生まれ育った“島”という環境に誇りを持っていた。ただその一方で、具体的にどのようにしていけばいいのか、どのような経路をたどっていけばいいのか、など具体的な将来像を思い描くのに少し苦戦しているようだった。私は大学生として自分が歩んできた道をもとに、道の岐路ごとにどういった価値観で選択してきたかなどを話しながら、中学生たちが少しでも将来について具体的なイメージが湧くようにサポートした。交流授業では生まれ育った環境も違い、価値観も異なる者同士でとても刺激的な時間を過ごすことが出来た。給食の時間になると、授業の時の真剣な様子と打って変わって一緒にバスケットをしたり、普段の学校生活の様子など他愛もない話しをするなどして盛り上がった。東京のことについても興味があるようで様々な話しをした。西ノ島中学校の教師や教頭先生も非常に協力的に今回の交流授業を支えてくださり、来年以降もこのような機会を持続的に設けていきたとおっしゃってくださった。

4日目にインタビューさせていただいた、西ノ島町役場の方のお話もとても印象に残っている。形式としては私たちから質問をし、それに答えていただくというものだが、西ノ島町役場の方々はお忙しいなか時間を空けてくださったうえに、ひとつひとつの質問に対して非常に丁寧にお答えをくださった。西ノ島町の基本的な産業のことから、いまの町の現状、これからの課題など、資料を用いて素人の私たちにも理解できるようにして下さった。

た。1年生は自分が興味や関心のあることから質問を始め、2年生は自分のゼミで専攻している分野を絡めながら、少し専門的な質問をぶつけることで、単なるインタビューにとどまることなく、その先へと話しを進めていくことができたと感じた。地域系のゼミを専攻している人にとっては、またとない貴重な時間であり、自分たちが研究している他の地域の取り組みと比較しながら進めていた。私自身は、“隠岐諸島”という独特の環境下だからこそその取り組みや課題などについて、この地域の特異性に焦点をあてていくつかお話しを伺うことが出来た。普段の講義のなかで、“まちづくり”であるだとか、“少子高齢化”、“産業の跡継ぎ問題”など地域が抱える様々な課題について知ってはいたのだが、実際に現地の方からそういった課題についてお話しを聞くと、話しにリアリティーがあって、差し迫った課題なのだというのを改めて感じさせられた。そしてお話しをしながら、「そういった取り組みは少し前はやっていたが、いまはしていない。」という返答がいくつかあった。地域が抱える課題の改善や解決への取り組みであることは間違いないのだが、他の地域で成功しているからといってこの地域でも成功するとは限らないのだと考えさせられた。その地域の特色にあった取り組みでなければ、“継続性”といった側面が弱くなってしまい、改善や解決に向かって行かないのである。このあたりのことは実際に現地に来て、現地の人のお話しからでないとは分からないことであると感じた。講義で、文字や写真から学ぶことももちろん大切ではあるが、それを実際に現場でアウトプットすることで初めてわかることもあるのだと改めて考えさせられた。短い時間ではあったが、西ノ島町役場の方々のおかげで非常に充実した時間を過ごさせていただいた。

観光でもさまざまな経験をさせていただいた。西ノ島町の観光名所のほとんどは周らせていただき、島の壮大な自然を経験することが出来た。島を観光していて感じたのは、人と人との距離が近いことである。島ですれ違う人と挨拶を交わすことは自然であり、バスで乗り合わせた人とは自然と会話が弾む。とにかく人との距離が近く、東京よりも人口はかなり少ないはずなのにもかかわらず、寂しさを感じない。東京のような都心ではこういったことはまずないのではないだろうか。同じ地域に住んでいても見たことあるくらい、だとか挨拶を交わさないことだってある。電車やバスでは誰もがスマホとにらめっこしている。それがあたりまえになっており、初めて島を訪れて話しかけられた時には驚いたのを思い出した。東京のように人が多い土地の方が、人と人との関係性が希薄で寂しさや孤独感を感じるのだと思った。もちろん人が多いからその人と再び会う可能性は島に比べればかなり低いし、いきなり話しかけること自体があまり受け入れられるような空気感でもない。しかし、島の人とのコミュニケーションを通して、こういった人との温かみを感じられるのもいいなと思った。この人の温かさは、私が再びこの地域を訪れたいと思った理由の大きな部分である。

隠岐諸島の観光で最も印象に残っているのは壮大な自然と星空である。国指定重要文化財である焼火神社を訪れたときの感動は今でもはっきりと覚えている。怖ささえも感じられるほどの荘厳さがあり、とても文字に表すことができないような感動を覚えた。島のパ

ワースポットと称されるのも納得だった。

星空は、夜空のどこを見ても満天の星空が広がっており、東京では決して見る事の出来ない景色であった。東京では完全な暗闇を経験することさえ難しい。夜であっても街頭やビルの明り、24時間営業の店舗など何らかの明りがある。しかし、島では自分の足元さえも見えないほどの暗闇があり、その暗闇があるからこそ星の光がより際立って見えるのだ。壮大な自然があるからこそその星空であった。

今回の国内研修を通して、この島根県隠岐諸島だからこそ出来る経験をし、お話しを数多く聞くことが出来た。東京では感じる事の出来ないものばかりである。こうして充実した1週間を過ごすことができたのは、島の人々の温かさと今回の島前研修を計画してくれた運営の方々のおかげである。様々な人たちへの感謝を忘れることなく、今回の経験を生かしてこれからの学びに役立てていきたい。